

日本アメリカ史学会第 61 回例会報告 有賀夏紀さん追悼企画

日時：12 月 15 日（日）14 時～17 時

会場：専修大学神田キャンパス 1 号館 201 教室、オンライン併用

<趣旨説明> 14:00～14:10

南修平（専修大学）

<第 1 部 有賀さんの思い出> 14:10～15:50

司会：南修平（専修大学）

貴堂嘉之（一橋大学）

小檜山ルイ（フェリス女学院大学）

山田敬子（山川菊栄記念会）

油井大三郎（東京大学・一橋大学名誉教授）

宮田伊知郎（埼玉大学）

<第 2 部 会場・オンライン参加者によるトーク・リレー> 16:00～17:00

司会：梅崎透（フェリス女学院大学）

第 61 回例会は、3 月 7 日に逝去された有賀夏紀氏の追悼企画として開催され、対面・オンライン合わせて多くの参加者が集った。

南氏より趣旨説明が行われた後、第 1 部では故人と特にゆかりの深い 5 名が登壇して思い出を語るとともに、アメリカ史、ジェンダー史、歴史学研究の分野をはじめ多大な貢献をなされてきた有賀氏に敬意を表した。貴堂氏からはまず、『ジェンダー研究を継承する』アーカイブ特設サイト上の有賀氏へのインタビュー映像の共有が行われた。学部生時代に有賀氏と出会い、バークレーへの海外研究を機に親しくなったと語る貴堂氏は、ニューレフト史学が主流の時代に「底辺からの声」を届けるアメリカ社会史を日本にいち早く伝え、「多文化主義」の重要性を説きながら当該分野のパイオニアとして第一線を走り続けた故人の功績を称え、「天国から認められる程度には頑張っていきたい」と締めくくった。

小檜山氏は、アメリカの最先端の研究に対して網羅的に目を配り、批判的に消化した後、日本に紹介する「演繹的」な有賀氏の研究手法を振り返り、後の研究者世代とは一線を画すものがあったと語った。「ジェンダー史は女性史である」という有賀氏の歴史観や、ア

アメリカ学会における分科会の設立という多大なる貢献への言及もあった。院生時代に研究会での報告を勧める電話を受けたことで親交が始まったという小檜山氏は、「若い頃から導いていただいて本当に幸せだった」と結んだ。

山田氏は、有賀氏の山川賞受賞時のスピーチや山川菊栄記念会選考委員時代のエッセイを紹介するとともに、単語一つ一つに対して丁寧に向き合う姿、アメリカの女性史研究者としての第一人者たる自負、新しい研究に対する深い理解に思いを馳せ、「深い喪失感」があると悼んだ。おしゃべりを楽しんでいる時の伸びやかな様子や笑顔が素敵で印象的であったと振り返るとともに、ITに強く会のHP作成を担っていた「技術者」としての一面も紹介がなされた。

修士課程に同期入学の油井氏は、ご家族へのインタビューを基に有賀氏の歩みを辿った。当時の学生運動の中心地であったカリフォルニア大学バークレー校（UCB）への留学が有賀氏に与えた影響の推察や、「バークリーヤン」としての国際的知識人ネットワークが故人の研究生活に果たした役割にも言及があった。教職や家事・育児・闘病を抱える中で博士論文を完成させるという精神力の強さや、正義感が強く常に弱者の側に立ち続けた姿が印象的であったという。有賀氏が残された業績が次世代の研究者によって引き継がれ、更なる研究成果の充実につながることの期待も示された。

有賀氏の指導生である宮田氏は、「アメリカ研究の先生」かつ「historian」である故人の教育者としての姿を振り返った。包括的に学ぶことや先行研究への重視、とにかく量を読ませて書かせる指導スタイル、学生との家族ぐるみのつながり、バークレーご滞在中の夏休み期間でもFaxで論文を送ると丁寧なコメントをつけて返して下さるという手厚さ、歴史学の営みが歴史の産物であることの強調、柔らかい顔で時にはビシッと物申す姿、時には学生より前に「つんのめる」行動力をはじめ、数多くのエピソードが共有された。学問は「愛と尊厳」と語り、社会を根幹から見据えてその葛藤を描き続けた有賀氏の遺産を守っていく決意が述べられた。

続く第2部では、梅崎氏の司会により、フロアにトーク・リレーが開かれた。元指導生からは、厳しくもネガティブなことは言わない、アットホームで優しい、相談によく乗ってくれる先生と懐かしむ声が上がった。幅広い人々とフラットな関係性を築き、常にマイノリティーの味方として個人の権利や尊厳に対する信念を貫き通した姿勢へは多くの賛辞が送られた。学生時代はノンポリであったという一方、後半生では反戦・平和運動に尽力し続けた有賀氏と「あの世まで連帯」の誓いを交わしたという思い出も語られた。忍耐強さや堂々とした姿は、後進女性研究者のロールモデルでもあったという。有賀氏が紡いだきれいな英語の文章に憧れたという話や、アメリカの学会に参加した際には院生の発表スケジュールを把握して緻密なメモを残していたという勉強熱心な姿、友人と散歩をしながら唱歌を歌う声がきれいだったという思い出も寄せられた。晩年は特に命の大切さを詠

えていらっしやったようである。多くの参加者が有賀氏に学問上においても個人的にも
様々な形で刺激を受け、お世話になったことを強調しており、お人柄を偲ぶあたたく貴重
な時間となった。（文責：山崎香織）